

# 幸福な悪夢—『クリスマス・キャロル』における フェアリー・テイルと聖書的モチーフ

川 崎 佳 代 子

G. K. チェスタトンには、ディケンズ評伝の中で、陰鬱なロンドンの街を活気づかせるディケンズ独特のリアリズムの秘密として次の文章を引用している。

... one in St. Martin's Lane, "of which I only recollect it stood near the church, and that in the door there was an oval glass plate with 'COFFEE ROOM' painted on it, addressed towards the street. If I ever find myself in a very different kind of coffee-room now, but where there is an inscription on glass, and read it backwards on the wrong side, MOOR EEFFOC (as I often used to do then in a dismal reverie), a shock goes through my blood."<sup>1)</sup>

このエピソードを、ディケンズの倒錯した心理とか、カメラ・アイ的観察癖とか解釈するむきもあるようだが、チェスタトンによると、このありふれた単語を逆さに読むことで生じる異質な発音には、たちまち人を別世界に引きずり込む効果がある。ちょっとしたマジックで、視点が変わり、周りを見回すと、霧の向こうの通りはさながらフェアリーの森の迷宮の感がある。これがディケンズ化したロンドンであるとチェスタトンは言う。

救貧院や孤児院の悲惨さや、負債者監獄のあの不気味なほどのリアリズムは他のヴィクトリア朝作家の追従をゆるさない。『荒涼館』にみられる大法官裁判の気の遠くなるような長引く訴訟と裁定。『リトル・ドゥリット』における迂遠省の描写などには、痛烈な社会風刺を含んだ鋭いリアリズムがみられる。にもかかわらず、物語全体は、そうしたリアリズムを打ち消すような印象をうけるのである。それは、メルヘン的あるいはフェアリー・テイルに極めて近い雰囲気を生じさせているものである。「写実のファンタジー」とか「ロマンティック・リアリズム」とディケンズの小説をよぶのも、このためであろう。

19世紀はフェアリー・テイルが再び注目され始めた時期である。スコットやサッカレー、ブロンテ姉妹、そしてジョージ・エリオットでさえもフェアリー・テイルのモチーフを使った<sup>2)</sup>。フェアリー・テイルの擁護に力を注いだディケンズは、他の作家よりずっと積極的にフェアリー・テイルのモチーフやテクニック、テーマを用いている。彼は、1853年9月14日にウィルズ宛、「…空想やロマンスのない国民は決して天が下で偉大な地位を占めることができないだけでなく、これからも占め

ることはいないだろう…』<sup>3)</sup>と書いている。ギッシングは「普通の人々が毎日の習慣しか見ていない所に、ディケンズは驚くほどの可能性を感じ、それに満たされている」<sup>4)</sup>と言っている。それは、COFFEE-ROOMの中に別世界をかぎとる精神であるともいえよう。そして、ディケンズは、自分がロマンスを感じ取るだけでなく、他の人々にも日常生活の中で非凡なものを感じとってほしいと望み、それを効果的に表現するものとして、フェアリー・テイルを援用したと思われる。

(1)

フェアリー・テイルは一般に考えられているほど単純な願望成就の物語ではない。シンデレラはたしかに魔法使いに助けられたかもしれないが、もともと彼女は王子の花嫁になってもおかしくはない出自なのである。意地悪な継母のため虐げられていたことが、むしろ非現実であったといえよう。したがって、良い魔法により呪いが解けたという方が近いのではないだろうか。蛙の王子も然りである。同様に、オリヴァー・トウィストも、孤児院から悪党フェイギンのもとに苦しみ、最後には金持ちの後継者におさまるといふシンデレラ・モチーフをたどるが、彼も本来の身分に戻ったという方が正しい。この物語を貫いているのは、善はあらゆる逆境をたえぬき、最後に勝利するというフェアリー・テイルの原則にほかならない。

『大いなる遺産』におけるピップの出世と挫折の物語は、いわばアンチ・メルヘンを形成する。自分の希望を叶えてくれる良い妖精と思っていたミス・ハヴィシャムが、単にひねくれた人間嫌いであり、本当のスポンサーは脱獄囚のマグウィッチであった。貧しいピップがシンデレラの梯子を登りはじめたが、彼を紳士にするための金が犯罪人の懐からのものであることがわかり、ピップは捨てた故郷へ戻るのである。この経過の中で、夢は破綻するが、真に価値あるものが何であるか知るにいたる。このように、ディケンズがフェアリー・テイルの枠組みを好んで使う一つの理由は、その形式が、ひとが本来の自分（アイデンティティ）をとりもどすプロセスを簡潔に表現するからである。

ディケンズの生きた19世紀半ばのイギリスは、実際は、フェアリー・ランドの美しさや魅力を欠いていた。彼はそれを批判的に見るだけでなく、そこに住む人々を連れ出して、「できるだけフェアリーの世界に似た世の中につくりかえること」<sup>5)</sup>を望んだのである。とはいえ、フェアリーの世界に変貌したロンドンも決して理想郷ではない。トルキンも言うように、フェアリー・ランドには良い妖精もいれば、悪い妖精もいる。誘惑に満ちた、危険な陥穽も待ちうけている、予断の許さぬ世界である。しかし誠実に歩む者は最終的には勝利するというハッピー・エンディングをディケンズは書き続けた。そして、この点において、フェアリー・テイルとディケンズの信じた聖書の世界観は一致するのである。

ディケンズは英国国教会の信徒であった。感情の起伏の激しさ、短気、無邪気なまでストレートな野心、反逆的精神など、穏健なクリスチャンのイメージから逸脱するようにみえるが、懐疑主義が知識人の中に広がりつつあった時代にあって、ゆるぎない信仰をもっていたと思われる。みづか

ら『イエスの生涯』を書くことによって、子供たちに信仰を奨励したことからもそれが窺える。彼は、この世界を「良きもの」として創った神の愛と、「一人の人間は限り無く尊い」という聖書の根本を堅く信じていた。貧困と教育の欠如を誰よりも憂いたが、経済的貧困より尚救いがたい魂の貧困さがあることも見逃さなかったのである。人も世界もたしかに修正を必要としている。そして修正の可能性は最後まである、とみていたようである。『クリスマス・キャロル』は、こうしたディケンズの考えから生まれてきたといえよう。クリスマスのために、彼はいくつかの短編を書いたが、聖書的な改心の物語は、何よりもフェアリー・テイルの様式が相応しいと考えたのである。

(2)

『クリスマス・キャロル』は、けちで他人を寄せつけないスクルージという老人が、クリスマス・イブの不思議な体験を通して改心し生まれ変わるといふフェアリー・テイルである。フェアリー・テイルの形式が使われているということは、この物語のいくつかの特徴から明らかである。まず、「昔々、…」(Once upon a time…)というフェアリー・テイル特有の語り口が使われ、最後に主人公がずっと善人で楽しく暮らしたことで締め括られている。また、スクルージは「秘密を好み、交際を嫌い、牡蛎の殻のように孤独な老人」(secret, and self-contained, and solitary as an oyster)と描写されている。「かれの行く所どこでも冷たさがつきまとい」、「どんな暖かさもかれを温めず、どんな寒い日もかれを凍えさせることはできなかつた」(No warmth could warm, no wintry weather chill him.)のである。彼はフェアリー・テイルに登場する貪欲なガリガリ亡者のイメージそのままであり、アーキタイプな人物として考えられよう。したがって、心理的な必然性からはこの人物を改心に導くことは無理で、それが出来るのはフェアリー・テイルにおいてだけである。また、序文に、作者が「幽霊の本」(Ghostly little book)と呼んでいるとおり、この物語にはマーレーを含み4人の超自然的存在が登場する。また、マーレーや精霊と共にスクルージが空を飛んだり、自由に時間・空間を移動する点など、ファンタスティックな要素がふんだんに盛り込まれている。教訓を含んだハッピー・エンディングなど、この物語がれっきとしたフェアリー・テイルであることを示している。

この物語のテーマは勿論一人の人間の改心である。その改心は、クリスマスの意味をめぐってなされる。スクルージにとって、クリスマスとは、カレンダー上のただの1日にすぎない。他の日と何ら区別するべき日ではない。そもそもクリスマスの起源すら彼の念頭にはない。それどころか、事務員には有給休暇をとられるし、得なことは何一つない。

... but a time for paying bills without money ; a time for finding yourself a year older, and not an hour richer ; a time for balancing your books, and having every item through a round dozen of months presented dead against you? (p. 8)

彼にとって、クリスマスとは「くだらん」(humbug)の一言につきるのである。

スクルージの家は彼の境涯を象徴するかのようになり、他の家庭から切り離され、孤独な男の一人住まいにはいかにもふさわしい。

He lived in chambers which had once belonged to his deceased partner. They were a gloomy suite of rooms in a lowering pile of building up a yard... that one could scarcely help fancying it must have run there when it was a young house, playing at hide-and-seek with other houses, and have forgotten the way out again. (p. 17)

家へだどりつく間、霧が建物の周りを取り囲み、スクルージの家はいつの間にかフェアリー・ランドの中に建っているという印象を抱かせる。そうすると、ノッカーがマーレーの顔に見えたり、階段を霊柩車が走っても不思議ではなくなるのである。閉じたドアが勝手に開き、七年前のクリスマス・イブに死んだマーレーの亡霊が彼の前に現れる。マーレーの亡霊の出現は、読者に二つのエピソードを思い出させるだろう。一つは、初めに物語の中で言及されているとおり、ハムレットの父の亡霊である。鎖を幾重にも巻きつけた、経帷子姿のマーレーが、悔い改める前に死んだため、生前の罪の重みに苦しめられている状況を語る場所は、まさしくハムレットの父王の煉獄の苦しみの描写と重なり合う。亡きハムレット王は息子に、「夜はあてどなく地上をさまよひ、昼は地獄の業火に取り巻かれ、生前この世で犯した罪の数々の焼き浄められる苦しみに堪えねばならぬ定め」(Act. 1, sc. 5)と嘆いている。善王といわれ、息子に「二度と現れぬくらい立派な人物」といわれるハムレット王が息子に復讐を誓わすが、恐ろしげな中にコミカルなマーレーの亡霊は、自分の轍を踏むなど忠告にやってきたのである。そして、ハムレットとスクルージの亡霊に対する反応の違いも興味深い。ハムレットが亡霊を父のものとしてただちに認めたのに対して、スクルージは、「信じないのか」と問うマーレーに、「信じない」と答える。「五感をどうして信じないのか」とさらに問うマーレーに、スクルージは以下のとおり答えるのである。

‘Because,’ said Scrooge, ‘a little thing affects them [senses]. A slight disorder of the stomach makes them cheats. You may be an undigested bit of beef, a blot of mustard, a crumb of cheese, a fragment of an underdone potatoes...’ (p. 24)

合理的な説明によって自分を納得させようとするスクルージの態度は現代のわれわれと殆ど同じといえよう。しかもスクルージはマーレーの忠告が殆ど心に響かず、ただ早くこの妙な出来事が過ぎ去ることを念じるだけである。こうして、マーレーの亡霊出現は、ハムレット劇のパロディというより、新約聖書ルカの福音書のエピソードを連想させるのである。ルカ第16章に「ラザロと金持ち」の諺がある。毎日きれいな着物を着て、贅沢に暮らしている金持ちの家の前に、ラザロという貧し

い病人がいた。この二人が死ぬと、ラザロは天国へ行き平安を与えられる。一方、金持ちはハデスで苦しむ。そこで、金持ちは、天のアブラハムに、自分と同じ目にあわぬよう兄弟に忠告するため、誰か死者を送ってくれと頼むのである。「もし誰かが死んだ者の中から彼らのところへ行ってやったら、彼らは悔い改めるにちがいありません」と金持ちが言うと、アブラハムは、「もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たとえ誰かが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない」と答えるのである。

スクルージは、この喩え話の金持ちのように贅沢に暮らしているわけではない。彼は他人が遊んでいる時も惜しんで働き、あらゆる楽しみを抑え、富を築いてきたのである。ルカ伝に出てくる金持ちとスクルージの共通点は、「なぜ私は気の毒な人たちをかまわずに通りすぎたのだろう」とマーレーが言うように、あえて貧しい人々に同情を示さなかったところにある。クリスマスにキャロルを歌う子供たちを、飴一つもやらず追いつ返し、貧しい人々への寄付を断り、税金を納めているのだから、あとのことは政府の仕事である、自分は義務を果たしているのだと譲らない。それどころか、貧しいのは、その人々の怠惰のゆえだと言わんばかりである。飢えて死ぬなら、余剰人口の軽減になって、むしろ喜ばしいとすら言う。クリスマスだからといって、なぜ特別にするのか、とかみつく次第である。しかも、自分をも楽しませないという点で、スクルージはあの金持ちより一層罪が深いといえよう。

アブラハムの言うとおりに、マーレーの出現だけではスクルージの凍結した心をとかすまでにはいられない。そこで、マーレーはこれから三人の精霊がやって来るので、その間に改心するよう忠告するのだった。三人の精霊とは、「過去のクリスマスの霊」(the Ghost of Christmas Past)、「現在のクリスマスの霊」(the Ghost of Christmas Present)、「未来のクリスマスの霊」(the Ghost of Christmas Yet to Come) で、それぞれ、アレゴリカルな意味をもっている。

過去のクリスマスの霊は、スクルージの埋もれていた記憶をよび覚ます働きをする。「子供のよう」であるが、白い長髪の老人のようにもみえる。しかし、しわ一本なく、健康そうな顔色をし、強そうな手足をしている。しかも、彼の存在は、ごく近くにいるにもかかわらず、遠くにいる感じもするのである。

The voice was soft and gentle. Singularly low, as if, instead of being so close behind him, it were at a distance. (p. 41)

過去のクリスマスの霊は、スクルージが実際に経験した過去であるという点で近く、それを長い間忘却していたという点で、遠く感じるのである。スクルージはこの霊に連れ出されて、時を遡り、少年時代のクリスマスをまるで映画をみるように再体験するのである。その当時はスクルージは孤独で、一人きりのクリスマスをすごさなくてはならなかった。スクルージ少年のただひとつの楽しみは、ファンタスティックな読書（『アラビアン・ナイト』らしい）であった。かつて彼は想像の世界

で孤独を癒していたことを思い出す。それから妹がクリスマスを祝うため彼を家へつれもどしにやってくる光景を見て、妹の優しさ、家庭ですごくクリスマスの嬉しさを思い出すのである。心やさしい妹の忘れ形見である甥のフレッドが、妹がかつてそうしてくれたように、いつもクリスマスの食事に招待してくれていることを思い出すにはおられない。なぜ忘れていたのか、と精霊にたずねられるまでもなく、彼の心は過去へと遡っていく。青年時代、親方の所で過ごしたクリスマス・イブの底抜けの陽気さ、親方の雇い人への愛情をしみじみ振り返ることになる。少しの費用でこれほど他人を喜ばすことができることを彼は忘れていたのである。しかし、次の場面では、彼は仕事にかまけて恋人を失う。愛か金か、二者選択の時、金を選ぶ自分の姿を今客観的に見て、スクルージは取り返しのつかぬ選択をしたことに気づくのである。この後、おそらく彼の閉鎖的な傾向はますます強まり、今に至ったのであろう。孤独な人間が、傷つけられることを恐れ、自らのまわりに防御の垣根をめぐらせたあげく、いつのまにか偏屈な人間嫌いになり、知らずに他人を傷つけている。スクルージはこういうタイプの人間であり、ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』の主人公によく似ている。親友、許嫁、教会に裏切られたサイラスは、二度と裏切られまいと心を閉ざし、人との交際を避けて暮らし始める。その時サイラスが唯一よすがとしたのが金である。スクルージが金儲けにあくせくしたのも同じ心理であろう。過去のクリスマスの霊は、スクルージに埋もれていた記憶をほりかえさせ、彼の人生の誤りが奈辺にあったのか気づかせようとしたのである。それゆえ、この霊は、子供のようにであり知恵深い老人のようでもある。

次に現れた、現在のクリスマスの霊は、陽気で豊かである。シンプルな濃緑色のローブを着ている。その緑の服には白い毛皮が縁どりされている。永遠の生命を表す緑に、清さをあらわす白、そして一枚仕立てのシンプルな服に、キリストのイメージを重ねることも無理ではないが、むしろ、スクルージの正反対のイメージとして機能している。秘密や人工的なまやかさを嫌うかのように、胸も足もあらわである。髪の毛は長くのびやかで、顔と同じように自由な感じである (long and free; free as its genial face)。目は輝き (its sparkling eyes)、手もあけっぴろげで (open hand)、陽気な声 (cheery voice)、抑圧のない態度 (unconstrained demeanor) そして喜ばしげな様子 (its joyful air) は、すべてスクルージが欠いている特徴である。

スクルージはすでに心を開きかけていたので、従順にこの精霊に導かれて、現在のクリスマスの風景を眺めに行く。事務員ボブ・クラチットの家をのぞく。貧乏人の子沢山、しかも末っ子のティムは足が悪く病弱である。スクルージの払う賃金では、とても満足なクリスマスを祝えないはずなのに、彼の家庭は何と暖かい、心豊かなクリスマスを迎えようとしていることか。家族ひとりひとりが愛し合い、小さなことにも感謝をもって喜べるからである。貧しさが、ボブの家庭ではむしろ清さになっているのがよくわかる。しかも、ひどい扱いを受けながらもボブはスクルージに感謝することを家族に教えるのである。スクルージはティムを見て初めて自分以外の人間に対して痛みを感じる。スクルージが人間性を回復してきた証しでもある。

一方、甥の家庭では、愛する家族や友人たちと楽しい団欒が繰り広げられている。どんなにすげ

ない対応をしても、甥は伯父を愛し、彼がクリスマスの喜びを分かちあえるよう願っているのである。フレッドがスクルージに言ったクリスマスの意味は、この物語のテーマといえよう。

... I am sure I have always thought of Christmas time, when it has come round — apart from the veneration due to its sacred name and origin, ..., a kind, forgiving, charitable, pleasant time; the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys. And therefore, uncle, though it has never put a scrap of gold or silver in my pocket I believe that it has done one good and it will do me good; .... (p. 9)

親切で、寛容で (forgiving), 気前よく (charitable), 気持ちのよい (pleasant) こと。胸襟を開く時期という形容詞は、先に描写したクリスマスの霊の特徴と一致することがわかる。

最後に現れた「未来のクリスマスの霊」は、第一、第二の精霊と異なり、頭巾をすっぽりかぶり顔が陰になって見えない。これは、一つには未来が明白な事実となっていないことを表しているが、もう一つには、その未来が決して希望あふれたものでないことを暗示している。死んだことを喜ばれ、ベッドのカーテンまで剥ぎ取られている哀れな死者がほかならぬ自分であることを知ったスクルージは身震いするのである。さらに、ティム坊やが死に、クラチット一家が悲しみの中にいる光景を見て、スクルージは他人の不幸を心から悲しみ、苦しむのである。未来のクリスマスの霊は終始無言であった。スクルージは、彼の指し示す未来は、現在の自分が、今の生き方を改めずにいたら将来起こるであろうという予想図であると思い、決心するのである。今、生き方を180度変えれば、未来が変わることを信じて。

三晩続いたと思われた精霊の訪問は、実は一晩のうちの出来事であった。クリスマスの朝を迎えてスクルージはまだ間に合うことに欣喜雀躍する。一晩で彼は善人になったのである。

### (3)

スクルージに欠けていたものは、一言でいえば、想像力であろう。彼には自分以外を思いやることが出来ず、一人の人間の生き方が、広い意味で他者と深く関わっていることを想像できない。現在のクリスマスの霊が、彼の足下から「貧困」と「無知」を象徴する惨めな子供を見せたことは、スクルージを含んで、自分さえよければ他人はどうでもよいという社会の無関心さを指摘するためである。グレアム・グリーンは、愛の反対語は憎悪ではなく、むしろ想像力の欠如であると言っているが、それは連帯意識の欠如にもつながる。自分を守ることに汲々として、他人の痛みを共感で

きなくなっただけでなく、自分を愛することすら忘れてしまうのである。記憶を取り戻すことによって、彼から想像力や共感が引き出された。三人の精霊が、スクルージに過去・現在・未来のクリスマスを見せたのは、彼が直接体験しないかぎり悟らないことを知っていたからである。しかし、「見ないで信じる方がもっとよい」のである。

マーレーの亡霊から始まる不可思議な体験は、すべてスクルージの見た一夜の夢であったかもしれない。たとえ、それが夢であったとしても、覚めているときのヴィジョンであったとしても、このヴィジョンや夢は、明らかにスクルージへのクリスマス・プレゼントとして贈られているといえよう。アブラハムも言ったように、だれかが死者の中から甦っても人を改心させることはできないだろう。しかし、ちょっとしたきっかけによって、一人の心に埋もれていた可能性を引き出すことはできるであろう。神は一人の魂さえ滅びるのを望まないのであれば、改心のチャンスを人間に向かって送りつづけるであろう。マーレーはスクルージに次のように言う。

I am here tonight to warn you, that you have yet a chance and hope escaping my fate.

(p. 31)

スクルージの性格描写は極端で、改心後の変容ぶりも極端に思える。しかし、『クリスマス・キャロル』をフェアリー・テイルとして読めばステレオ・タイプな人物像も納得できる。なぜなら、フェアリー・テイルでは、不可思議な出来事の方に中心があり、人物のリアリスティックな心理にはあまり関心を払わないのが普通であるからである。それによって、アーキタイプなスクルージの特徴の中に、万人 (everyman) の傾向——自己中心——が見えてくるのである。

失われた人間性を回復するサイラス・マーナーも、スクルージの物語も共にフェアリー・テイル仕立てになっているのは決して偶然ではない。ただ、エリオットはリアリズムをあくまで守ろうとするため、できるだけ超自然的なものを排除しようとし、主人公の救済の手段を子供としている。

古い昔のこと、人々の手をとって、破滅した町から遠くの土地へ、人々を連れさっていく天使たちがあった。今日では、そういう白い翼をもった天使の姿をわれわれは見る事が出来ない。それにもかかわらず、やはり人々は、恐ろしい破滅の中から救われていくのである。一つの手が彼らの手にさしのべられ、その手は人々を明るい国へと、やさしく導いてゆくのである。そして人々は、二度と後を振り返ってみようとはしない。その手とは、幼児の手でもあろうか<sup>6)</sup>。

ディケンズは逆に、天使ともいえる精霊という超自然的存在を登場させることにより、この物語を完全にフェアリー・テイル化したのである。というのも、ディケンズは、フェアリー・テイルが「喜びの源泉や想像力に訴えるがゆえに、感受性をもつ、道徳的な人間の成長にとって不可欠な食物」<sup>7)</sup>であると思っていたからである。ワーズワースにとって「自然」が人間性回復の妙薬であった



ように、都会を描くディケンズにとって、フェアリー・テイルがその同じ機能を果たすと思われたのであろう。

フェアリー・テイルは、幸福な大団円を持ち、根元にある真実を垣間見させるものであると、トルキンは「妖精物語について」の中で指摘し、その点で、福音書はもっとも偉大なフェアリー・テイルであると述べている。人はみな罪人であり、それゆえにスクルージを共有する。しかし、彼がクリスマス・イブに精霊の訪問というプレゼントを与えられ改心したように、われわれもまた彼に倣うことができるのである。ストーンの言うように、「『クリスマス・キャロル』は現代のわれわれにとって神話あるいは、フェアリー・テイルである」<sup>8)</sup>。そうした普遍性をもっているために、クリスマスが近づくたびに、この物語は喜びをもって繰り返し読まれるのである。

## 注

- 1) John Forster, Charles Dickens, quoted by G. K. Chesterton in his *Charles Dickens* (東京, 研究社), 昭和7年, p. 37.
- 2) シャーロット・ブロンテは『ジェイン・エア』で、塔に閉じ込められた狂女やシンデレラ・モチーフを使っている。エミリー・ブロンテの『嵐が丘』では、ヒースクリフに changling などのフェアリー・テイルの要素を見出せる。ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』は、伝説あるいはフェアリー・テイル的な手法が用いられている。(拙稿「『サイラス・マーナー』におけるフェアリー・テイルのモチーフ」, 神戸山手女子短期大学英文学科『英米文学』No. 2, 1990参照)
- 3) Kotzin, Michael C., *Dickens and the Fairy Tale* (Ohio: Bowling Green University Popular Press), 1972, p. 39.
- 4) Gissing, George, *Charles Dickens: A Critical Study*, quoted from Kotzin, *ibid.*, pp. 44-45.
- 5) Kotzin, *ibid.*, p. 89.
- 6) Eliot, George, *Silas Marner* (London: Everyman Library), 1993, p. 150.
- 7) Kotzin, *ibid.*, p. 43.
- 8) Stone, Harry, 'A Christmas Carol: "Giving Nursery Tales a Higher Form"', *Charles Dickens*, ed. by Harold Bloom (NY: Chelsea House Publishers), 1987, p. 159.

## 〔参考文献〕

- ① 田辺昌美, 『チャールズ・ディケンズとクリスマス』(京都, あぼろん社), 1985.
- ② 小池滋, 『ディケンズとともに』(東京, 晶文社), 1983.
- ③ アンガス・ウィルソン, 『ディケンズの世界』, 松村昌家訳 (東京, 英宝社), 昭和56年.
- ④ 松村昌家, 『ディケンズの小説とその時代』(東京, 研究社), 1989.
- ⑤ Zipes, Jack, *Breaking the Magic Spell* (NY: Routledge), 1979.
- ⑥ Tolkien, J. R. R., "On Fairy Stories", *Essays Presented to Charles Williams*, ed. by C. S. Lewis

幸福な悪夢—『クリスマス・キャロル』におけるフェアリー・テイルと聖書のモチーフ

(Michigan: William Eerdmans Publishing Company), 1966.

⑦ Opie, Iona and Peter, *The Classic Fairy Tales* (London: Oxford University Press), 1974.

⑧ Carpenter, Humphrey, and Prichard, Mari, *The Oxford Companion to Children's Literature* (London: Oxford University Press), 1984.